

## Ⅱ 幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められること

### 1. これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力

ここでは、中教審答申(平成 27 年 12 月)に沿って、(1) 幼稚園教諭として不易とされる資質能力、(2) 新たな課題に対応できる力、(3) 組織的・協働的に諸問題を解決する力の 3 つの視点から、これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力について述べている。

#### (1) 幼稚園教諭として不易とされる資質能力

幼稚園教諭に求められる資質能力は、幼稚園教育要領に示す 5 領域の教育内容に関する専門知識を備えるとともに、5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての側面からみていく必要がある。また、幼児期の教育では、家庭と連携して幼児一人一人の成長を支えることも重要であり、保護者との関係を構築する力や、小学校教育との円滑な接続のために必要な力、特別支援が必要な幼児への指導を実践していくために必要な力等の諸課題に適切に対応していく専門家としての側面からもみていく必要がある。

#### (2) 新たな課題に対応できる力

中教審答申(平成 27 年 12 月)では、これからの時代に教員に求められる資質能力として「これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である」、さらに「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICT の活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である」と述べ、自律的に学ぶ姿勢を持ち、自らの資質能力を向上させ、情報活用能力や知識の構造化を指摘し、新たな課題に対応できる力を付けることの必要性を述べている。

平成 30 年実施の幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質能力や、幼児の発達に即して「主体的・対話的で深い学び」に沿っての不断の指導改善などの幼児期の学校教育としての充実のための視点が示されている。必要に応じて幼児の体験と関連させながら ICT を活用し、幼児の体験を豊かにしていくことや、教員一人一人がカリキュラム・マネジメントに参画していくことなどの新たな課題に対応できる力量をつけることも求められている。

さらに、近年、核家族化や地域のつながりの希薄化から、子育て家庭を取り巻く環境が

大きく変化してきたことから、幼稚園における子育ての支援も多様化し、常に実態に即した工夫改善が求められている。また、幼児に対する虐待への対応等、親子関係について園外の専門機関との連携をしながら子育ての支援をしていくことも必要になることもある。これまで求められてきた幼児理解に加えて、保護者理解、保護者を通じた幼児理解、さらに、幼児の姿を通じた保護者理解が求められ、これらに対応できる力が必要になってきている。これら新たな課題に取り組み、必要な対応ができるようになるためには、自律的に学ぶ姿勢をもち続け、自ら資質能力の向上に向けて努力を惜しまない新たな課題に対応できる力を付けることが重要である。

### (3) 組織的・協働的に諸問題を解決する力

中教審答申(平成 27 年 12 月)では、これからの学校教員は、チーム学校の考えの下で、多様な専門性をもつ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要であることを指摘している。

幼稚園の場合は、1園当たりの教員数が比較的少ないので、これまでも教員間の連携を深め、目的の実現のためにはチーム学校として活動することが求められてきた。そこでは、得意分野を活かし同僚と協働して、豊かな体験を保障する環境を構成する等、協働的に諸問題に取り組む力が求められてきたと言える。近年の幼稚園に寄せられる期待やニーズが多様化、かつ複雑化していることを踏まえると、さらに限られた人材の中で効果的に連携し仕事を分担するなどの組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が求められる。連携には、幼児を中心においた保護者との関係構築、地域の子育て支援に係る機関や専門機関等の異なる専門家との連携なども含まれる。

## 2. 幼稚園教諭の養成段階に求められること

これら幼稚園教諭には多様な専門性が求められていることを踏まえると、幼稚園教諭の養成段階においては、これからの時代の幼稚園教諭の資質能力を明らかにした上で、幼稚園教諭の養成段階から現職段階への一貫した理念に基づいてその資質能力の向上を図り、長期的かつ総合的な視野をもって養成にあたる必要がある。

保育教諭養成課程研究会では、平成 26 年度より「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅠー質の高い教育・保育の実現のためにー」「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡー養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修ー」を作成してきた。平成 28 年度は、「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅢー実践の中核を担うミドルリーダー養成ー」を作成した。これら研修ガイドでは、一貫して幼稚園教諭・保育教諭としての成長とキャリアステージに応じた研修の在り方を論述している。

これらの研修の背景には、図 1 に示す、幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程の考え方があり、特に、養成段階では、幼稚園教育についての基礎的な知識や理解、技能を修得することが課題であるが、これらの修得過程を通して、「実習などいろいろ大変だが、や

「やっぱり子供が好き」という、子供に対する温かな関心や感情をもつことである。こうした幼稚園教諭としての成長を見通した上で、その養成段階で何を理解し身に付けるかを考える必要がある。

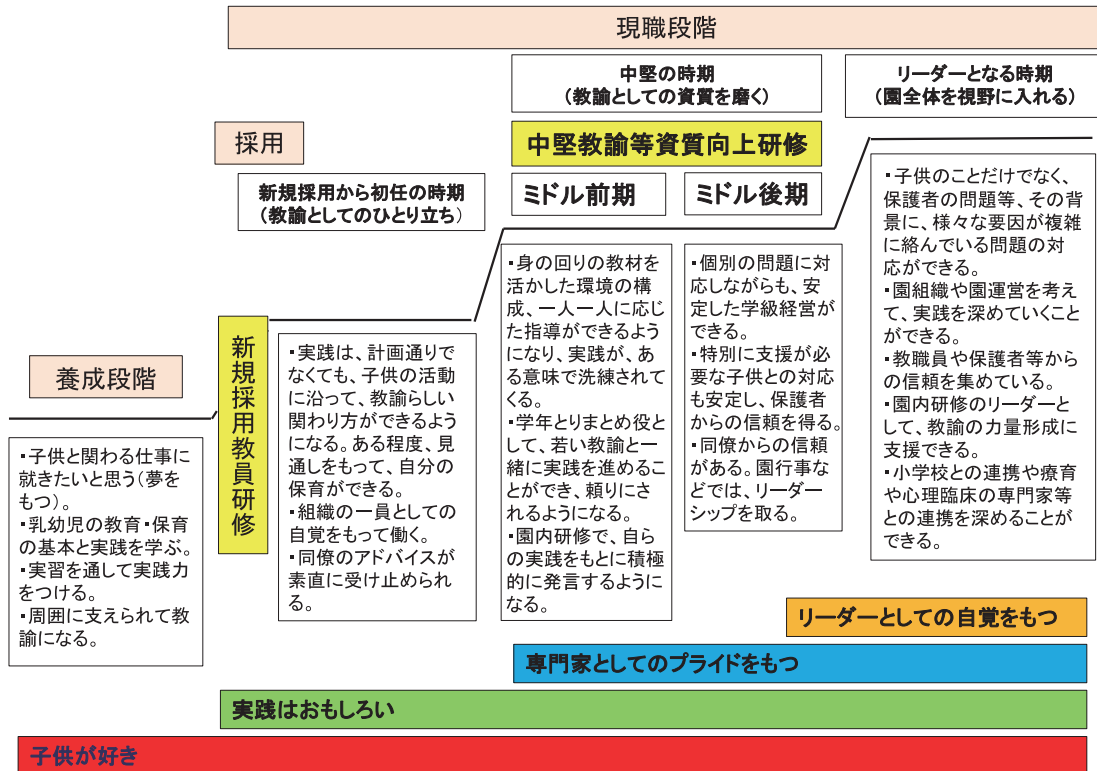


図1 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程

平成28年度文部科学省「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託」「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅢー実践の中核を担うミドルリーダー養成ー」(保育教諭養成課程研究会)より